

あらずじ

シンは、幼い頃に母を亡くし、父の元で大工修行に励みながら大きくなって行きますが、八歳のときにはその父親も事故で亡くしてしまいます。シンは、一人暮らしをしていたお祖父さんに引き取られ、町一番の棟梁に預けられて大工修行を続けて行きますが、出世頭となったシンを妬む兄弟子の嫌がらせを受けて大けがを負い、その後、介護をしながら支えてくれたお祖父さんまで亡くしてしまいます。

…肉親を失い独りぼっちになったシンでしたが、自分の産まれた家に戻ると心機一転、家具職人として新しい一步を踏み出す決意を固めます。そして、店の準備に取り掛かり、明るい希望に胸も膨らみ始めたそんなある日のこと、見知らぬご婦人が訪ねてくると突然、「何よこれ。あー気持ち悪い！」と言うなり、紙の包みを投げるように手渡し帰ってしまいます。何重にも包まれた紙包みを開いてみると、中からは、絡み合う二匹の蛇のような獣の彫られた「銅鏡」が現れました。

ご婦人は、お祖父さんの家を買ってくれた人のようで、銅鏡は…その昔、宮司だったご先祖様が社に祀っていた、古に伝わる「神器の鏡」でした。…が、そうとは知らぬシンは、銅鏡を磨いて新しい店の玄関に飾ることにしました。

それから数年後、元気になったシンは大工仕事に復帰すると、たちまち建築現場の親方に申し上がるまでに出世します。しかし…酒と遊びを覚えたために生活はどんどん乱れて行ってしまいます。…そして、そんなだらしのない自分を責める日を送っていたある日のこと、お祖父さんが亡くなる前の晩に話していたように、ボロ布を纏ったような老人が訪ねて来ると、玄関先に飾ってあったその「銅鏡」を指して、「…わたしは、此処へ導かれたのです」と、そのボロボロの身なりからは想像もできない旅の嘶しを語り始めました。

「…わたしは王様でした」と、話し始めた老人の国に、ある日、「マガラ」と呼ばれる魔法の箱が持ち込まれると、国の人々の生活は、それまで考えられなかったような便利で快適な暮らしへと姿を変えて行きます。しかし一方で、人々の心の中の不安は増え続け、国の中には、それまで起こったことなかったような凄惨な事件や事故が頻発して行きました。老人はその原因が「マガラ」に在ると考え、国の中から、その「悪」を追い出す企てを立てますが、しかしその決断が、老人を永い長い旅へと導くことになります。…こうして老人は、国を出て砂漠を彷徨い歩いた末に「マガラ」の国に辿り着き、そこで出会った人により、「悪」は「マガラ」の中ではなく、弱い自分の心の中に作り出していたことを識ります。

—「マガラ」とは、息子ハン王子の第一側近に取り立てた、ゼムラに依ってもたらされた魔法の箱で、ゼムラの先祖は遠い昔、この国の領主でありながら老人の先祖に国を追われ世界を流浪する中で、「マガラ」をその「復讐兵器」に作り上げたのでした—

老人はその後も、王様であつたら知り得なかったであろう「命の宝物」を得ながら、「マガラ」とゼムラを巡る心の戦いは、銅鏡に印された「謎」の解き明かされる「その時」へと導かれ…、そして、老人の話が終わったとき、シンはそこに、「秘密」を分けて飛び立つ光り輝く龍を見ました—

時代が過ぎ行こうと変わらない、命のテーマを追い求めたファンタジー物語。